

読んでみました

堀井弘一郎著

『満州』から集団連行された鉄道技術者たち

―天水「留用」千日の記録―

(創土社刊1400円＋税)

一般社団法人中国研究所顧問

武吉次朗



本書は、中華人民共和国の建国初期に、甘粛省天水から蘭州までの鉄道敷設に関わった日本人技術者とその家族の史実である。

70年前の日本敗戦後、中国東北部に進駐した共産党と八路軍（中国人民解放軍の前身）は、医師と看護師、工業技術者、鉄道関係者など、さまざまな職種の日本人1万数千人を残留させて協力を要請した。中国語で言う「留用」である。家族を含めると2万数千人にのぼった。

これらの人たちは帰国の日を待ちわびつつも、日本人特有の職人気質から、与えられた仕事は決して怠けず手抜きせず、細心丁寧にやり遂げた。このことは中国人上司と同僚たちに強い印象を与えた。そしてこれに対応して、中国共産党は次のような政策を定めた。「留用の日本人は捕虜ではなく友人である。政治面

では日本軍国主義者と明確に区別し、一視同仁にあつかう。仕事の面ではその技術を尊重し、努力を信頼する。生活面では同等に処遇し、可能な範囲で民族の習慣に配慮する」というものだった。「留用」日本人の一人である評者の知るかぎり、この政策は日本人のいるすべての職場で貫徹、実行された、と言ってよい。

1950年秋、東北各地で働いていた日本人の鉄道関係者約300人に突然、移動命令が下った。家族も含めて900余人が着いた先は、西安の遥か西、シルクロードの天水で、ここから蘭州まで鉄道幹線（天蘭線）を敷設する工事に参加することになった。

天蘭線は、最終的には新疆まで通じる西北大動脈の一環で、全長354kmだが、地形が険しく、トンネル54、橋梁1013という難工事だった。日本人は測

量・設計・施工・電気・信号・検査・修理・輸送・医療など各分野で重要な役割を果たすとともに、中国人同僚への技術指導にもあたり、共に汗を流した。その結果、工事は予定を8か月も繰り上げて完成、1952年10月1日の建国3周年記念日に開通し、一番列車が疾駆した。毛沢東主席から祝辞が寄せられた。

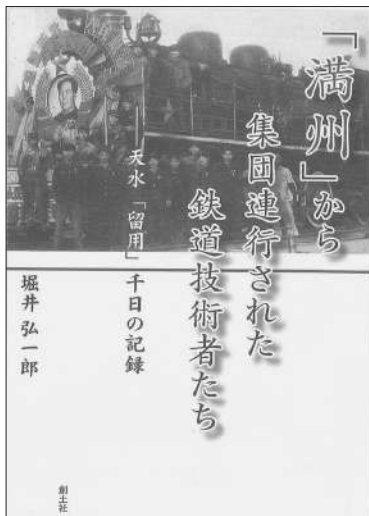
主婦たちは夫の仕事を支え子どもを養育する中で、周囲の中国人と日常的な付き合いが増え、双方の間の溝がしだいに埋められ、住民たちの素朴さと善意に満ちた心根に、見知らぬ土地に來た不安や不満がやわらげられていった。

親たちの最大の気がかりは子どもの教育だったが、中国側の格別の配慮と東北から行動を共にした元小学校校長等の協力、小学生80人のため鉄路職工子弟小学校日籍班（日本人クラス）が編成され、

中学・高校生32人は同中学校（天水鉄中。初級3年、高級3年から成る）に編入された。

天蘭線開通の翌年（1953年）春、中国各地で「留用」されていた日本人が帰国することになり、天水では職場でも学校でも送別会が催された。出発の日には寒風が吹きささぶ中、駅のホームは見送りの同僚と子どもたちであふれ返り、涙、涙の別れとなった。鉄中で担任だった王書荊先生は、「日本に帰っても勉強がんばるんだよ。そして、中国の友達のことを忘れないように。将来はみんな、日中友好の懸け橋になるんだから」と饒（はなむけ）の言葉を贈った。後に、多くの日本人生徒が、この言葉を身をもって実践していく。

帰国した彼らに当たる風は冷たく、



「中共帰り」「アカだ」と言われ、不本意な人生を送った人々も少なくなかった。だがめげることなく、翌1954年には「天水会」を立ちあげて、励ましあい親睦を深めており、分厚い会報は今も発行されつづけている。

1999年には天水会会員の拠出を基に天水市に桜の木1000本が贈られ、同市政府が天蘭線工事の業績を記した石碑を建てて「中日友好桜花園」が完成、市民の憩いの場として親しまれている。あれから60余年がたち、当事者の大半は鬼籍に入ったが、天水会の活動は当時児童生徒だった2世に引き継がれている。

周恩来総理は1954年、日本の訪中団と会見した際、「留用」された日本人の業績を次のように高く評価した。「日本の多くの友人がrippaな仕事でわれわれを援助していただいたことに、たいへん感謝しています。多くの中国人が負傷したとき、日本の医師に手術してもらい、病気になったとき、日本の看護師に看護してもらいました。信頼していたからです。工場でも、中国人は日本の技術者を信頼し、いっしょに機械を動かしました。これが友誼であり、ほんとうの友誼、たしかな友誼といえましょう。これ

こそが、われわれの友好の種子なのです」。天水を含む「留用」日本人の業績により、その可能性が実証された喜びが周恩来の言葉から伝わってくるようだ。

中国中日関係史学会が来日取材をくり返して、「留用」日本人の業績を編纂した図書2冊が、拙訳により『新中国に貢献した日本人たち』『同・続編』として刊行された時、後藤田正晴・元副総理は推薦の言葉に、「日中両国の無名の人々が苦しみと喜びを共にする中で、友情を育み信頼関係を築きあげた無数の業績こそ、まさに友好の原点といえよう。登場人物たちの高い志と壮絶な生きざまは、今の時代に生きる私たちへの叱咤激励である」と書かれた。本書もその評価を裏付ける貴重な記録である。

最後に苦言を1つ。本書の書名に「集団連行された」とあるが、この言葉からはどうしても、銃剣を突き付けられ命が危険にさらされる中での「強制連行」を連想させられてしまい、本書の客観的で公正な内容との乖離が甚だしい。天水会役員たちもこの書名に強い難色を示したと仄聞するが、それをおしてまでこの書名にされたのは、営業優先のためか。まことに遺憾、と言わざるを得ない。